

開 催 報 告

種 別	公開シンポジウム
開催日時	2025年5月17日（土）13時00分 ～ 16時30分
開催形式	対面開催
対面会場	中央大学市ヶ谷田町キャンパス301号
講 師	【基調講演】 村井 純 氏（慶応義塾大学特別特区特任教授） 「インターネット文明」 【シンポジスト】 頼住 光子 氏（駒澤大学仏教学部仏教学科教授） 「日本思想における共生—仏教・儒教・神道など伝統思想の観点から」 宮本 久義 氏（元東洋大学教授） 「インド人の思考法と共生」 【コメンテーター】 岡嶋 裕史 研究員（中央大学国際情報学部教授） 【司会】 保坂 俊司 研究員（中央大学国際情報学部教授）
テーマ	「インターネット文明」を支える「やさしさと思いやりの思想」をめぐって—慶応義塾大学・村井純博士をお迎えして考える「インターネットとの共生」—
参加者数	48名

＜報告要旨＞

今回の企画は、インターネット構築の立役者として世界的に高名な村井 純博士（慶応義塾大学特別特区特任教授）をお招きし、博士が構築された、日本発のアジア型インターネット網の特徴やその構造について解説いただいた。

「村井インターネット思想」が目指したものは欧米のような縦型のピラミッド構造であり、一部の人間や機関が全てをコントロールする集中管理システムではない。「誰でも参加でき。誰も取り残さない」という、いわばパソコンを使う個々の人間が対等な関係を持つ相互依存システム（仏教ではこれをマンダラ構造と言う）であると言え、事実、そのような構造が博士を中心に構築されているように捉えることができる。

但しこの点について、博士ご自身はあまりご自覚を持っておられないとのことであった。

そもそも今回の企画は、博士のインターネット構築の思想的背景について明らかにすることを試み、日本の文明レベルの特徴である利他重視の思想（菩薩思想）等との関連を考察するという趣旨であった。その目的の下、日本思想の専門家として頼住 光子氏と、インドでの長い生活体験を背景に、日本文明の基本的な流れを形成している仏教及びインド思想に造詣の深い宮本 久義氏をシンポジストとして招聘した。ご両名には、日本思想の背景にある他者との共生の思想について解説していただき、ディスカッションを重ねた。本プロジェクトでは、「共生」なる言葉に関し、また改めて別の機会（2025年6月21日）に思想研究者との討論の実施を検討しているが、共生思想は生物学でも用いられる言葉であり、その意味で人文・社会科学と理工系の諸学との共働作業

を可能にする。つまり、共生関係を構築出来る思想である、と研究代表者（保坂／主宰者）は考え、今回の企画に至った。

技術とそれを用いる人間の捉え方において、特に日本的な融和共生感（一体感、あらゆるものに魂が宿る的な日本の思想や、仏教の縁起思想が産む平等性を重視したプラットホーム）が、博士の全人类的な相互依存的な共生構造の無自覚智（主宰者の造語）を形成し、それが独自のインターネット技術構築の思想的な原動力となっているとの結論に達した。さらに、博士が「誰も取り残さない」構造構築のために、ボランティアでその激務を遂行してきたというモチベーションの背景にも仏教の菩薩道（宮沢賢治の「雨にも負けず」を参照）があるのではないかとその行動原理を分析している。

このように結論すると主観的ではないかと思われるであろうが、日本の技術やそれを産みだした技術者には、多かれ少なかれこのような技術に人格ならぬ存在格を認め、それを尊重し、個人的な欲求で独占せず、無償、あるいはそれに近い形で公開する、との発想がしばしば見られる（QRコードなど）。万物に霊性を認め、尊重するという日本の伝統思想である。しかし、それがゆえに、技術を私物化せず、その技術が秘める可能性を尊重し、それとの最善関係を構築する（これが日本的な共生思想と言える）ことを優先し、アメリカなどで盛んな新技術の独占により巨万の富を得ることを最優先する技術者との間に差異が生じる場面もある。博士において顕著であると言える、利他性を重視する菩薩思想を基本とする技術者は日本の風土から生まれていると言っても過言ではないだろう。

利他主義を重視する日本の技術的な思想（倫理思想）は、科学技術の暴走に対し、世界に貢献できる可能性が大きいのではないだろうか。その時に、日本的な「技術と人間の共生」として、博士のインターネット思想は重要な事例となるであろう。ちなみに、インターネットを和語でいうと「(梵) 網間接続」になるとの考えも生まれている。「梵網」とは仏教の言葉で、梵天の持つ網には、その編み目一つ一つに世界を写す鏡があり、相互に他者を写しつつ全体世界が形成されるという比喻である。これなどは、まさに博士のインターネット理論の比喩的なモデルである。

以上を受け、本シンポジウムの締めくくりにコメンテーターの岡嶋研究員より技術的な視点からの有益なコメントがあり、司会を務めた保坂が総括し本企画は盛会裏に終了した。

<シンポジウムの様子>

